

整えたのです。しかし、全国 15 か所の地裁裁判で勝訴したのは、この時点では神戸地裁だけであり、全国の原告の高齢化等の事情があり、2008 年 3 月政府の新しい支援策を受け入れるために、残念ながら控訴取り下げの決断をしました。

その後、帰国者の希望に沿い、日本語教室やその他の支援活動を続けています。当初は帰国者一世が主な対象でしたが、現在は二世三世の参加者が多数を占めています。神戸・明石のほか、尼崎・宝塚・伊丹等でも地域密着型の支援活動が行なわれています。

あの世の居場所が欲しいという帰国者の切実な念願により、神戸市舞子墓園の一画に「兵庫県中国帰国者公墓」と「記念碑」を建立しました。2019 年 3 月 26 日、兵庫県知事（代理）・久元神戸市長はじめ多数の関係者を招いて竣工式を行ないました。記念碑碑文の原文は、兵庫県中国帰国者の会植田恒陽代表執筆の中国語ですが、たくさんの日本人にも読んでいただくために、日本語翻訳文を刻みました。なお、「公墓」は中国語です、日本語は「共同墓地」。中国黒竜江省方正県の「日本人公墓」と同じです。

戦争末期の根こそぎ動員により、45 歳以下の男性はすべて招集され、開拓団には老人・女性・子どもしかいない状態で、ソ連軍の攻撃を受け、悲惨な逃避行の中で、病死・餓死・凍死・集団自決があり、関東軍の根拠地であるはずの方正（ホウマサ）まで行けば何とかなるとたどり着いた方正で、たくさんの日本人難民がここで力尽きました。ここに留まっていた日本人女性が現地政府に陳情し、最終的には周恩来首相の裁可を得て、ここ方正に「日本人公墓」が建立されたのです。今では黒竜江省方正は日中友好のシンボルであり、方正からたくさんの新華僑が日本へ来ています（参照：『改革開放後の中国僑郷』山下清海 明石書店 2014 年 12 月）

残留孤児一世は、政府の対応の遅れのため、帰国時点でかなりの年齢であり、日本語を話せないままの状態で家族のために働き続けたのです。日本社会に向かって発信する力や余裕はありません。しかし、三世四世は幼い時に来日、或いは日本生まれも多く、言葉の壁はありません。神戸在住の老華僑新華僑の若い人たちと同じ条件です。自らの特異なルーツに誇りを持ち、海外華人の一人として存分に力を発揮してほしいと思います。



残留孤児の過酷な歴史などを刻む記念碑の除幕式
(神戸新聞の記事より)



完成した中国からの引き揚げ者らのための共同墓地
(毎日新聞の記事より)

日中の茶道について思うこと 中國文化同好会 近見 孝之

昨今では、今迄経験したことのない、新型コロナウィルス禍との共生時代の「新しい生活様式」(NEW NORMAL) に戸惑いながら、人々は家にこもりがちで、いつに無く安らぎのない生活を強いられている。社会生活も、また、大変に慌ただしい所為か、心の安らぎを希求したくなるような混沌とした日々を送らされているようと思われる。このような状況では、心の安らぎと癒しに対して「茶事」の果たす役割や効能には大きいものがあります。

「茶事」と呼ばれる「お点前」を見ることによって、茶事の礼儀作法は勿論のこと、その場で使用される茶器類、飾りつけやその場の雰囲気にはじっと凝視したくなる程の興味を惹く光景がみられる。それを日本文化の視点で捉えれば、これは単なる「光景」ではなく「風情」として捉えて、然るべきものでしょう。

お茶をたてる迄のゆったりとした時の過ぎゆくひと時、一期一会の心のこもったお点前、主人や正客の礼儀作法、茶を注ぐ仕草や着座の仕方、味見など。また正客の話し方や歩き方に加えて、一碗だけの「まさしく優雅なお茶の飲み方や味わい方」等々、これらは「茶室の風情」であり、どれをみても、中国では味わうことのできない、日本独自に長い歴史と伝統の中で育まれた、素晴らしい日本の固有文化であって、中国や中国人には、異文化と映るに違いないことでしょう。二、三列挙してみても‥

- a) 茶室の風情がとても美しかったり
- b) 一期一会の心のこもった、茶の湯の久遠に連なる独特の世界が味わえたり
- c) 日本文化の華である着物や足袋が殊更きれいに見栄えする
- d) 茶室の畳が古風豊かで、清々しくて清潔である
- e) 日本の茶事は至高の芸術である、等々

日本の茶道について調べれば、794 年に中国に渡り、入宋して「茶の作法」を身につけ、更に茶の種や茶器具を携えて帰国した“最澄禪師”が茶事を広めたことに由来するらしいが、侘茶の湯の完成の起源がそこらあたりにあるようである。他方において、中国の茶道の歴史も古く、800 年前後の唐代の「茶經」という書物に茶事が実存していて、中国の詩人でその茶經三巻を著述した“陸羽”が文人茶や禅人茶を広めたとされているが、当時では科挙や文人たちが茶飲を楽しんで語り合っていたそうである。現代中国では一般大衆が家庭や来客時には各種の茶器具を使って接遇します。私も幾度か中国や香港・台湾やその他の東南亞細亞地域へ行った機会に経験した中で、特に印象に残っているのは、接遇される折に、日本の盃に似た小さな湯のみでお茶を注いで出されたことです。そして、人差し指と中指をたててテーブルの端を小刻みに叩きつつも、遠慮気味に幾碗も戴いて談笑したことあります。上述の茶經の書物は星港の孫文の旧居宅二階の書籍棚にあった記憶があります。また、そういえば、私達の中国語会話の指導老師、藤軍先生から 2, 30 年前に聞いた中国の盧同の逸話を思い出します。即ち、

一碗喉吻潤
両碗破孤悶
三碗搜枯腸
四碗發清汗
五碗肌骨清
六碗通仙靈
七碗喫不得



近見 孝之さん

私は五、六碗飲んでみましたが、仙人のような心地よい気分に達しはしなかったのですが、皆さんならば、如何でしょうか？ 中国での昔からの言い習わしで茶飲は五、六碗位が良い加減な飲み方のようあります。日本では、一碗のお茶を優雅にゆっくりと味わいながら楽しむものようであり、このように、日本の茶道は時を経て発達し、美しく華麗な国文化として育まれて、現代に至っている事を知って、また他方では、中国文化の良い点もお互いに認め合うことの大切さも思い出し、有馬の山あいの境内で催された野点のお茶の会に参加し、ご綺麗どころを横座に仰いで、しみじみと体感した次第であります。

「移情閣」から世界が見える

企画運営委員・中國文化同好会 金川 幾久世

10 年ぐらい前のことだったと思います、初めて「移情閣友の会」関係の集いに参加させて頂いたのは。「元町街歩き」や「講演と孫文関連史跡を巡るツアー」等々の参加者募集記事を新聞で見つけ、直ぐさま電話で申し込みました。「神戸華僑歴史博物館」や「まちづくり会館」でレクチャーを受けた後の、「中華同文学校」・兵庫県庁第一庁舎横の「孫文先生大アジア主義講演跡」、旧華僑の信仰が厚い「関帝廟」・「走水（はしうど）神社」・媽祖（マツ）神が起源と言われる「松尾神社」、大倉山公園に併む「孫文像」等の見学は、目から鱗を落とす契機となりました。その後は仕事と母の介護で日一杯の日々。研修会開催の葉書の御案内を頂戴しながら、舞子公園の「移情閣」にも「研修会」にも不義理を重ねてしまつたのです。

実は、就職 3 年後には、大学で履修した中国語を学び直すため、帰りに「日中友好協会」に通い、土曜午後は「華僑総会」の中国語講座を受けています。勤務高校への中国語講師の派遣要請のため、足繁く「中華同文学校」を訪問し、「関帝廟」や「南京町の画廊兼喫茶」に立ち寄り、「漢詩を読む会」にも参加しました。ですから、現在の「移情閣友の会」に関わる神戸の華人・華僑の方々とのご縁は、既に、この頃から始まっていたことになります。

6 年前、元上司の校長先生に、親交のある華僑の方が日本語学校を創設されるから手伝ってあげてと頼まれたのを機に、日本語教師の資格取得と、日本語・日本文化について私自身も納得のいく説明が学習者にできるのとを目標に、退職前から大学院で学び始めました。

以来、神戸関帝廟の「普度勝会」「施餓鬼供養」に連続で参加させて頂くようになりました、そのご縁で「移情閣友の会」に正式に入会しました。林同福会長様、企画運営委員の方々には、何時も本当にお世話になっています。舞子の「移情閣」2 階講義室での「中國文化同好会例会」「特別講演会」「国際交流フェスタ」にも進んで参加し

ています。「総会」「新春のつどい」「忘年会」「移情閣まつり」「神戸華僑落地生根（らくちせいこん）150 年記念晚会」「国際音楽交流会」「愛樂之家音乐会」、孫文の孫である「穂芳女史の講演会」「梅蘭芳初来日公演 100 周年記念美術展」「日華実業協会」「神戸華僑総会」等の様々な文化活動にお誘い頂いて、視野も交流も広がるのを感じました。

幸運にも、一昨年は友の会の「台湾研修旅行」で、台南・高雄・台北の三都市への訪問が叶い、天津の老朋友との北京・天津・上海・杭州・蘇州巡りもできました。マレーシアのマラッカ奥地にある「国際イスラム大学」で日本語を、クアラルンプールにある「ヘルプ大学」では日本文化を、短期間指導しました。昨年は残念ながら、海外渡航はできずじまいです。

呉錦堂や孫文と縁の深い「移情閣」から、明石海峡、大橋、淡路島、瀬戸内海が望めます。眼前に広がる海原は太平洋、そして世界の海へと繋がっています。「移情閣」は会員となった私の視野や交流もどんどん広げ、このように世界へ海外へと繋げて見せてくれるのです。



天津にて



「私の多文化体験～外国につながる生徒との出会い・台湾鉄道一周旅～」

元高校教員・山本 紀子

大家好！高校の元国語科教員である私は、友の会主催の「国際交流フェスタ IN 舞子公園 2019」に顧問をしていました新聞部の生徒 10 名と参加し、取材させていただいたこと、昨年 8 月兵庫県在日外国人高校生交流会を孫文記念館で開催したことなどを縁に入会しました。どちらも後藤委員長のお誘いでした。多謝。また、今年 10 月 10 日の「国際交流フェスタ」で講演いたします。皆様とお会いするのを楽しみにしております。

私の多文化体験のスタートは、生徒たちと一緒に学んだ漢文です。中国や朝鮮半島の古代の歴史・文学は、日本文化の源です。書物だけでなく実際に中国の名所・旧跡を訪れた時は、雄大で悠久かつ現代的な中国に感動しました。ますます探究したいと思っています。また、勤務校や兵庫県・全国の学校に在籍する多くの外国につながる生徒たちと出会う中で、文化や価値観の違いを知り、世界が広く豊かであることを学びました。同時に日本で暮らす多文化の生徒たちが抱える多くの課題や苦悩・可能性も痛感しました。学校や地域に多文化共生が広がるように、退職後も「兵庫県在日外国人教育研究協議会」での活動を続けています。そして、忙しい教員生活の中で、時間を見つけて海外旅行も楽しみました。定年退職した 2019 年春から 1 年間は、